

‘元気るんるん’は湯田小学校のほけんだよりです。

元気るんるん



さあ、2学期が始まりました。まだまだ残暑は厳しいですが、夜になり、どこからか虫の音が聴こえてくると「秋が来ているなあ」と思いませんか？実は、この虫の音で秋感じるのは、日本ならではの風習なのです。西洋諸国には、虫の音を楽しむ習慣はありません。なぜなら、虫の音は工場の作業音と同じ、ただの雑音として認識され、日本で「ミーンミーン」とセミの鳴き声を表す擬声語も英語にはなく、「noise（雑音）」や「buzz（羽音）」で表現されます。

東京医科歯科大学・角田忠信名誉教授の研究によると、日本人とポリネシア人の脳の働きには、他の多くの民族と比べて大きな違いがあるそうです。人間の脳は、感性や感覚を司る右脳と、言語や論理性を司る左脳に分かれています。ほとんどの民族は、虫の声を右脳で認識するので、雑音として認識しますが、日本人とポリネシア人は、左脳で認識するので、言語として認識しているのです。これは、母音を中心とした日本語とポリネシア語と子音中心の言語の特性の違いによるものだと考えられています。

日本には美しい四季があり、その優しくも厳しくもある自然と共に生きることで、日本人の感性、能力は研ぎ済まされ、日本文化を創り出してきたのだと思います。虫の声を雑音ではなく、自然の声と受け止め、季節の移り変わりを楽しみませんか・・・。



9月の健康目標

< けがを予防しよう！ >

保健室物語

・・・ある日の保健室。

Aちゃんがやって来て、

「あの～、机で腕を打ったのでみてください。」

と言うので、
「どうして打ったの？」

と聞いたら、

「ころんで・・・」

「それって、自分で打ったの？」

と聞いたら、Aちゃんは、「うん」と言わない。

「じゃあ、だれかに押されて打ったの？」

と聞いても、Aちゃんは、「うん」と言わない。



どういっつちや?????

そこで、実際に、そのときのことを再現

してもらいました。

それで、そうなって、ああなって、こうな
ったわけね。なあ～るほど・・・

Aちゃん、言ってもいい？

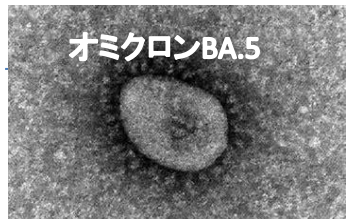
そ・れ・を、世の中では、自分で打った
と言うのでございますよ。もお～、なんて
こったパンナコッタ～・・・どうか、わかっ
てちゃんまげ・・・

みんなの力で、「新型コロナの変異株（BA.5）の感染拡大を抑えよう！」

現在、第7波の新型コロナの感染拡大が続いています。ウイルスは、BA.2からBA.5に変わり、小児を中心に家族内感染が増えています。

◆第7波が起こった背景

- ① BA.5の感染力が今までのウイルスよりも高い
潜伏期間は、平均で2.4日、BA.2より35.1%速く広がり、拡大スピードが速い。
- ② BA.5は「免疫逃避性」を持っている
免疫系とウイルスは常に戦っているため、免疫系が認識しにくいウイルスが生き残り、広がっていくので結果として免疫逃避性のウイルスが増えていくのです。BA.2・75というオミクロン株の亜系統も広がり始めていますが、今後も、もっと感染力の強いものが出てくるかもしれません。
- ③ 3回目のワクチンの免疫効果が低下している
- ④ 4回目のワクチン接種率がまだ低い



◆感染対策

- ① 「重ねるほど強い効果を引き出せる」という考えを持つことが大切
例えば、4つの対策の感染リスク低減の度合いを次のように仮定します。
● 双方のマスク着用で、感染リスクが約1/10
● 双方が対人距離を保つことで、感染リスクが約1/2
● 室内で送風・換気をする、感染リスクが約1/2
● 双方のワクチン接種で、感染リスクが約1/5
これらの対策を全て行う人のリスク減少の程度は、掛け算で表されます。

$$(1/10) \times (1/2) \times (1/2) \times (1/5) = (1/200)$$

→ 何も対策を行わない人に比べて、感染リスクが約1/200となる可能性があり、もし、これらの対策が完璧にできなくても、対策を重ねるほど高い防御効果を得られるので、感染性の高いウイルスでも防止できる可能性が出てくるのです。

- ② 基本を知ることが大切
病原体の場合、どのような経路で体内に侵入し、どのような条件で感染が成立し、身を守るためには何が必要か、といった基本的なことを理解することで、誤ったメッセージに惑わされることが少なくなります。
- ③ 絶対に甘く見ない
若い人たちの致死率や重症化率は下がりましたが、感染率が上がり、今までにない感染者の増え方です。高齢者のオミクロンの致死率は、インフルエンザよりも高いです。今後、BA.5より厄介なものがでてくるかもしれません。
- ④ 「まだ戦いは続く」という認識で、日常的に対策を行うニューノーマル(新常識)が大切
感染症との戦いは特別なものではなく、むしろ日常のこと、という前提で、自らが感染対策を重ねることによって、感染リスクを上げていくことが大切です。一人一人が、自分だけでなく、重症化しやすい高齢者や、様々な理由でワクチン接種ができない人などにも思いを馳せ、自分の周りの人や、大切な人を一人でも多く守れるような行動をしていきたいものです。



©2010kumamoto pref .kumamon

